

甲 田 遺 跡

一宅地造成に伴う発掘調査報告・その2 (KD2023-1) -

2024. 1. 31 富田林市教育委員会

1. はじめに

宅地造成に伴う発掘調査である。調査地は石川の西岸の河岸段丘の縁辺に立地する。甲田遺跡の東端に位置し、すぐ南側には水路と並行して東高野街道が通る。当該地は2022年に本調査(KD2022-1)を実施したが、調査後、計画の見直しが行われ、大幅な設計変更がなされた。そのため、協議を行い、新規道路敷設部分において未調査部分の調査を再度行うこととなった。調査は2023年7月12日から8月10日まで行った。実働20日間である。昨年度との重複部分を含めた調査総面積は169.12㎡で、実質の調査面積は71.9㎡である。

調査は今回の調査範囲のうち、重複分は昨年度の掘削底まで、未調査分は第1面直上までを機械で掘削し、実質の調査範囲を確定した。未調査部分は3箇所に分かれ、北側からA区、B区、C区と呼称した(図1)。

KD2022-1調査では、中世の遺構面を2面検出



図1 調査位置及びトレンチ位置図 (S=1/5000)

し、G L-0.8mの深さまで掘削した。第1面はG L-0.35～0.4mを測り、合わせ口の羽釜を埋納したSX58をはじめ、多くのピットや溝を検出した。第2面はG L-0.5mを測り、ピットや土坑のほか隣接する2007年調査地から続くと思われる落ち込みを確認した。遺物は中世～古墳時代の土器及び縄文時代の石織が出土している。なお、KD2022-1調査の成果はすでに報告済みである。あわせてそちらも参照されたい。

2. 調査成果

基本層序(図2)及び遺構面は、KD2022-1調査と相違ない。掘削深度は、A区でG L-0.6m(下層確認部分を含めるとG L-0.9m)、B・C区はG L-0.5mである。層序は0.35m厚の耕土と床土の下は、0.15m厚の黄灰～灰黄褐色砂質土の中世包含層(Ⅲ層)、0.1m厚の褐灰色砂質シルト及び灰黄褐～暗灰黄色シルト質砂質土の中世以前の包含層(Ⅳ層)で、A区に限り0.2m厚の黒褐色粘質土層(Ⅴ層)がみられる。その下はG L-0.5～0.7mで検出した地山層(Ⅵ層)で、にぶい黄褐色砂礫混じり粘質土ないしは、河岸段丘の基盤層と思われるにぶい黄褐色砂礫土である。

遺構面は2面あり、Ⅳ層上面(第1面)とⅤ層及びⅥ層上面(第2面)で確認した(図3)。

第1面はG L-0.35～0.4mで検出した中世前半の遺構面である。C区は耕土直下地山で、削平を受けており、第1面にあたるベース層が見当たらなかった。B区ではピット5基、A区ではピット3基、土坑1基、耕作溝13条を確認した。耕作溝はその大半が南北方向である。

第2面はG L-0.5～0.6mで検出した。C区で

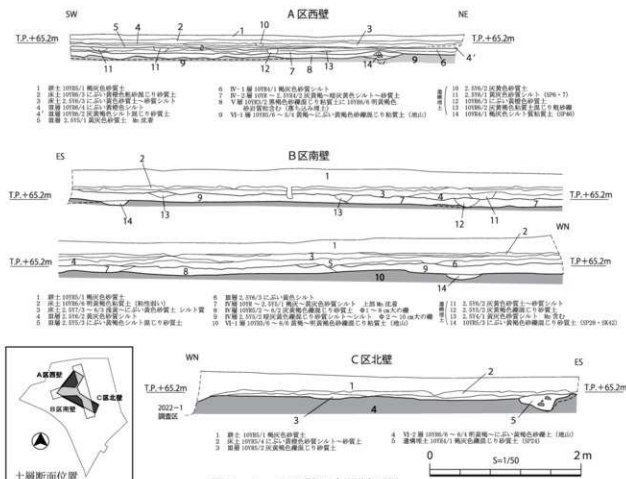


図2 A～C区壁面土層断面図

はピット4基を確認した。B区ではピット17基、土坑1基と、KD2022-1調査で確認したピットの続きを検出した。A区ではKD2022-1調査でみつけた落ち込み(V層)の肩部の続きを確認した。落ち込みの上面では遺構埋土との判別が難しく、ピットは2基を確認したただであったが、落ち込み埋土除去後の地山面(第2面下)ではピット29基、土坑1基、溝1条を検出した。これらの遺構は壁断面の様相や埋土、KD2022-1調査との検証から、本来、落ち込みの上面から切り込んでいたと思われる、第2面の遺構と認識した。

第2面の出土遺物は、土師器の小片もしくは細片のみである。A区第2面下では遺構から遺物はみつけられなかったが、落ち込み埋土中より古式土師器甕(図4-11)が出土した。落ち込みは古墳時代前期頃に堆積していたと思われる。

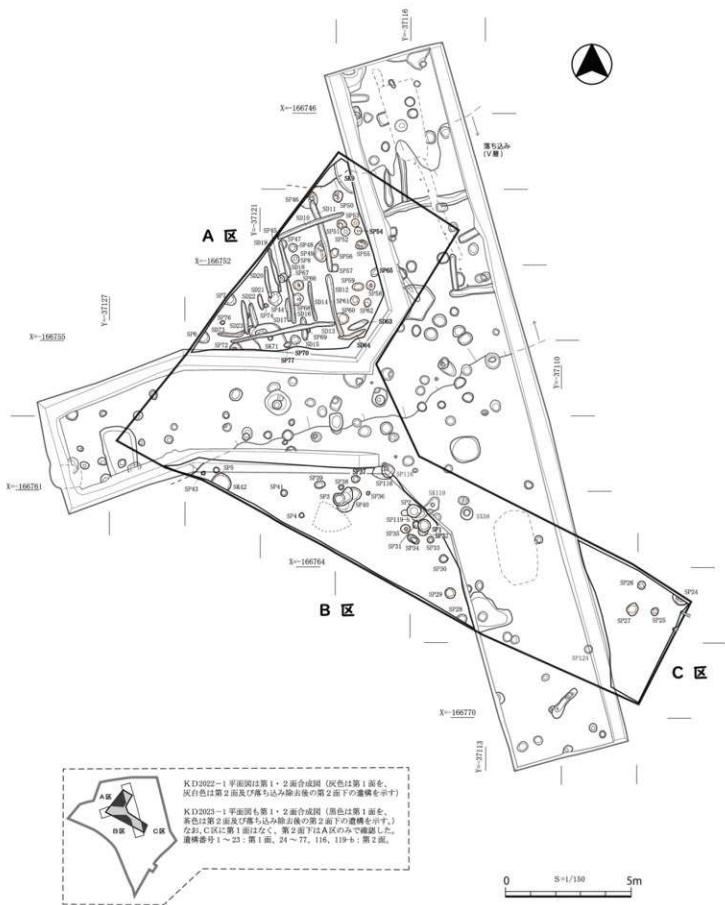
遺物はコンテナ1箱分出土した。瓦器、土師器、須恵器、瓦質土器、黒色土器、瓦、中国製の青磁

や白磁、サヌカイト製の剥片や石織、鉄釘などが出土したが、全体的に小片である。その中から12点を図化した(図4)。遺構出土遺物は細片のため図化できなかった。第1面の遺物は瓦器が主体で、第2面は土師器が多いが、時期の特定は困難な傾向がある。包含層出土遺物の多くは中世のもので、古墳時代中期の遺物も一定数確認している。

1～8は第1面直上の包含層から出土した。1は土師器小皿である。2は瓦器小皿、3～7は瓦器塊である。4～6は見込み部に格子状やジグザク状の暗文が残る。8は中国製白磁碗で玉縁状口縁を持つ。いずれも13世紀の所産である。

9・10は第2面直上の第1面ベース層から出土した。9は瓦器塊で、口縁端部に段をなす大和型と思われる、圏線は密で口縁端部まで巡る。10は土師器皿である。図化できなかったが、「て」の字状口縁を持つ土師器小皿片もみついている。

このほか、縄文土器または弥生土器と思われる



KD2022-1 平面図は第1・2面合成図（灰色は第1面を、
 灰白色は第2面及び落ち込み除去後の第2面下の遺構を示す）

KD2023-1 平面図も第1・2面合成図（黒色は第1面を、
 茶色は第2面及び落ち込み除去後の第2面下の遺構を示す。）
 なお、C区に第1面はなく、第2面下はA区のみで確認した。
 遺構番号 1～23：第1面、24～77、116、119-b：第2面。

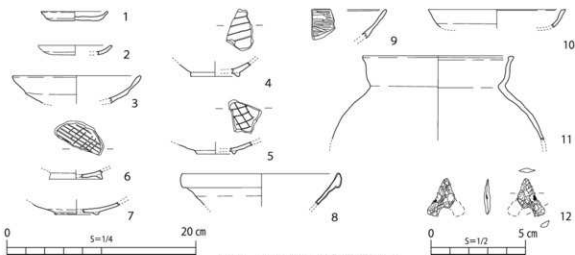


図4 出土土器 (S=1/4: 1~11)
S=1/2: 12)

底部片や、縄文時代の石鏃を確認している。石鏃(12)は最大長2cmを測る。残存は1/2ほどである。滋賀里Ⅱ～篠原式並行のものと考えられる。

落ち込みからは古式土師器甕(11)が出土している。この甕は復元径15.8cm、残存高8.9cmを測り、上半部のみ残存する。口縁部は肥厚し、体部は球体化している。磨減が著しく、調整がかろうじて確認できる程度で、外面にハケ、内面にケズリを施す。布留式新相の最終段階(5世紀中葉)のものであろう。落ち込み埋土からは同時期の別個体の甕の口縁部も数点出土している。この時期の遺物としてA・B区の第1面ベース層から「く」の字状口縁の甕や高坏などを確認している。

3. まとめ

基本的な成果はKD2022-1調査と同じである。ただ、第1面のベース層に「て」の字状口縁の土

師器皿及び黒色土器B類と思われる小破片を含んでおり、落ち込み埋積後の第2面の利用は10世紀後半以降であったと推察される。今回の調査で落ち込み内から古墳時代前期後半の古式土師器甕が出土したことは大きな成果である。KD2022-1調査では落ち込みの埋土上部で古墳時代～中世の遺物が出土しただけで、落ち込みの堆積時期の確定ができなかったが、これによって湿地状堆積となっていた落ち込みの埋積時期は5世紀中葉～後半まで遡ることがわかった。

参考文献

- 富田林市教育委員会 2008『甲田遺跡・喜志南遺跡発掘調査報告書』
富田林市教育委員会 2012『甲田遺跡～農地整備に伴う発掘調査報告書(020012-1) 一』
富田林市教育委員会 2023『甲田遺跡～宅地造成に伴う発掘調査報告書(020022-1) 一』

報告書抄録

| | | | | | | | | |
|----------------|--------------------------|-------|---------------|-------------------------------|--------------------|---------------------------|-------------|------------------|
| ふりがな | こうだいせき | | 副書名 | 宅地造成に伴う発掘調査報告書・その2 (KD2023-1) | | | | |
| 書名 | 甲田遺跡 | | シリーズ名・番号 | 富田林市文化財調査報告83 | | | | |
| 編集機関 | 富田林市教育委員会 | | 編者名 | 西村 雅美 | | | | |
| 所在地 | 〒584-8511 大阪府富田林市常盤町1番1号 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 2024 (令和6) 年 1月31日 | | | | | | | |
| ふりがな | ふりがな | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 発掘原因 |
| 所収遺跡名 | 所在地 | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| こうだいせき 甲田遺跡 | とんだばやしこうだい 富田林市甲田一丁目 | 27214 | 43 | 34° 29' 45" | 135° 35' 39" | 20230712 ～ 20230810 | 169. 12㎡ | 記録保存調査 (宅地造成) |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | | 特記事項 | | |
| 甲田遺跡 | 集落跡 | 中世 | ピット、溝、土坑、落ち込み | 瓦器・土師器 | | | | |

印刷 明朗社